



待降節第 1 主日 (マルコ 13:33-37)

典礼の意識的参加のために用意していただき

「あなたがたに言うことは、すべての人に言うのだ。目を覚ましていなさい。」(13・37) 待降節を迎えました。教会の暦は待降節から新しい一年が始まります。さらに言うとミサの福音朗読はA B C三年周期になっていて、今年はマルコ福音書を主に朗読するB年です。「目を覚ましていなさい」という呼びかけを、新しいB年の典礼を始める糧にしましょう。

新型コロナウイルスの脅威はいまだに去りませんが、この状況で典礼を行いながら感じたことがあります。平戸地区内、他の小教区でも似たような問題が起こっています。それは私たちが「教会の公式の礼拝である典礼に、これまで意識的に参加できていなかった」ということです。

具体的に例を挙げましょう。ミサは、「入祭唱」から始まります。典礼にオルガンを十分使用できていた頃、入祭の儀はオルガン奏者が典礼聖歌を弾くことで始まりました。皆さんはそれに合わせて歌いさえすれば良かったわけです。

ところが今は、入祭唱を地区の典礼当番の人が読み上げて入祭の儀が始まります。どのタイミングで、皆さん唱えているのでしょうか？規則には「どのタイミングで入祭唱を読み上げなさい」などというこまごましたことは書いてありません。それこそ、その担当者の思いやりとか、心がけが問われるわけです。

実際に、「あ～。このタイミングで入祭唱を唱えているということは、ミサが始まるきっかけを入祭唱が与えていることなどまったく頭に入っていないな」と勘ぐってしまう時があります。司祭の姿が見える頃にはもう唱え終わっている。それから間延びしたように司祭が入堂する。これでは、入祭唱の役割を果たしていません。

通常、「ミサ曲」と言われている「賛歌」の部分も、オルガン奏者が音を出してくれていた時はそれにただ従うだけでした。しかし今、オルガンを演奏しなくなって、「あわれみの賛歌」と呼ばれる「主よあわれみ給え」をどのタイミングで言うのか、意識しなければならなくなりました。その直後の「栄光の賛歌」は司祭が最初を唱えますが、皆さんは続きを祈祷書を見ないで言えるのでしょうか？オルガンに合わせて歌っていた時、何とな～く歌で唱えていた。それを意識して唱えるのは大変だと初めて気づいたでしょう。

同じように感謝の賛歌「聖なるかな」も、意識して会衆をうまく導かなければなりません。まだ司祭の叙唱の祈りが唱え終わっていないのに「聖なるかな～」と遮ることなどもってのほかです。「平和の賛歌」

(神の小羊) このあたりになるともう自分の務めは忘れてしまって、誰かが知らないうちに「神の小羊！」と代わりに言われてしまった。そういうことはなかったでしょうか？

いよいよ「拝領唱」まで進むと、意識にすら上らないかも知れませ

ん。司祭がキリストの血である御血を拝領して侍者の鈴が鳴らされた後、典礼部員に促されて、促されるままに拝領唱を唱える。こんなことでは、典礼に意識的に参加しているとはとても言えません。

もう一度、福音朗読の冒頭を読み上げましょう。「気をつけて、目を覚ましていなさい。その時がいつなのか、あなたがたには分からないからである。」（13・33）何かに気を取られて、入祭唱を唱え損ねている間に司祭はもう入堂して、ミサの意向を読み始めた。それから入祭唱を唱えようとしてももはや手遅れです。一瞬、気を取られてしまうのが今回なのか次回なのか、誰にも分からないのです。

今年の新型コロナウイルスの猛威は、カトリック教会にとっては私たちに典礼の意識的参加を強く促す出来事だったと言えるでしょう。平戸地区内の他の小教区でも同じような状況だそうです。

ついでに言いますが、典礼の意識的参加を求められているのは、典礼当番だけではありません。会衆全員が、どのタイミングで入祭唱を唱えたら、司祭も気持ちよくミサに入れるのか、自分が当番に当たっているつもりで、心の中で唱えてみると良いでしょう。そうすれば、皆が典礼に意識的な参加を果たすことができます。

もし、新型コロナウイルスの影響がしばらく続くのであれば、私たちは典礼の意識的参加のためにチャンスをもたらされたのです。新しく始まる典礼暦B年の始まりに当たり、今年の典礼暦は、さまざまな典礼行事に意識的に参加しましょう。

オルガン奏者に導かれたから何となく答唱を唱えていた。そんな参加の仕方をこの際改めましょう。よりよい参加、意識的な参加を心がけて、主の降誕を喜び迎えることができますように。取り次ぎを願っていきましょう。